

近代日本の歴史意識をめぐる一考察

三谷隆正を事例として

村松 晋

the historical policies in modern Japan

— on study of Takamasa Mitani —

Susumu MURAMATSU

抄録

敗戦後日本では、明治以来の「富国強兵」という「国是」こそ失われたものの、戦時動員体制における高度な技術と巨大な機構性は、復興と高度成長を目指す戦後の資本主義体制に引き継がれた。そのため、戦争を目的に組織されたガリソン・ステートは、戦後日本に託された理念とは裏腹に、その軍事的外装を脱ぎ捨てた形で存続することとなった。今や個人は、この殺伐たる機構社会の一部品として己の身をさらすほか、生きる術を持ち得なくなってしまうている。

この事態を精神的に問い直すとき、現代という時代とは、昭和十年代の魂を呻かせた、マルクス主義弾圧後の閉塞状況に根差す実存的課題をも、そのままに引き継ぐものであることに気がかされる。その課題とは、時間性の刻印をおび、歴史の中でつねに虚無と境を接している自我(筒井洋一郎「高倉徳太郎」キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史』ヨルダン社 一九九〇年 一七〇頁)の問題を射程に入れた、歴史形成的な世界観の探求にほかならない。

キーワード 近代日本 世界観 歴史意識 三谷隆正 キリスト教 マルクス主義 国家

1 問題の所在

三谷隆正（明治二十年～昭和十九年）は、内村鑑三につらなる無教会キリスト者であり、第一高等学校等で、法哲学や国家論を講じた教育者としても知られている。

筆者は既に、三谷の思想、信仰の全体像につき、時代状況を鑑みつつ、内在的な解析を試みた^①。そのため本稿では、三谷の言説それ自体の分析を超え、三谷が時代の中でいかに読まれたかという問題にふみこんで考察を加えてみたい。

顧みて三谷は、昭和初頭に第一高等学校の教授として赴任して以来、学生達の間で強い求心力を放った。その傾向は、『三谷隆正・人・思想・信仰』^②や『三谷隆正の生と死』^③に収められた数々の追憶文が物語るように、昭和十年代に入って顕著となった。

かかる精神的通底の事実は、三谷の人間の魅力など、とかく個人的レベルに還元して解されがちである。しかし、昭和十年代、三谷に師事した学生の多くは、後述のごとく、思想的にも構造的にも二重の面で閉塞した時代の中、国家と対峙しつつ、己が生き方を問わざるを得なかつた点で、突出した世代であった。

彼らがかくも切実な問を抱えた存在であった以上、三谷が放つた求心力の所以を鑑みるにあたっては、三谷自身の個人的資質に帰して解する視座を超え、昭和戦前期の知的青年が抱ける餓えをふまえつつ、精神的な考察が加えられるべきは論をまたない。それはまた後述のごとく、現代という時代の精神的位相を照射する上で、不可欠な営みと考えられる。かくして本稿では、主として昭和十年代の学生たちが、三谷の言葉にひかれた理由につき、彼らが直面した内なる渴望に着目する中で問い直してみたい。この試みを通じ、現代日本の課題としての「歴史形成的な世

界観の不在」という問題を考える、一つの場を示すことが、本考察の目的である。

2 規範的国家論の射程

三谷の下に集うた学生の多くは、ほぼ大正十年前後に生を受けて、昭和十年代に高等学校学生として青春を過ごした者たちだった^④。この世代が信仰の有無にかかわらず、三谷の言葉にひかれたことには、彼らが青春の時を過ごした昭和十年代における、思想的飢餓状況がかかわっていた。結論を先取りして言えば、三谷の言説は、戦争を目的とした統制国家の支配下で自己形成せざるを得なかつた青年の呻きに対し、閉塞を開き得る希望として、原理的な次元で対応を見せるものであった。

顧みて、マルキストの弾効が力で封じられ、内村鑑三、藤井武らの愛国者が「悲哀の人」たらねばならなかつた事実が照射するように、時の日本は問題の所在を根本から問うことなく、戦争に向けた体制再編成の強化にこそ、危機打開の道を求めていた。

殊に「東亜の盟主」たらんとする野望は、欧米の反発を招き、孤立をさらに深めたため、強力な統制国家の完成を急ぐという悪循環を生じさせていた。統制が強化されるほどに、ほころびた人心をつくらうべく、国家的価値の付与も強化されざるを得ないゆえ、国家総動員の時代、心身両面への圧迫は、構造的に必然化したのであった。

かくも相乗的な抑圧を前に、理想を失ってさ迷える昭和十年代の青年が、深刻な呻きをもたらすのは自明であった。昭和九年には、「不安の哲学」を説くシエストフ、あるいは信仰をめぐる赤裸々な苦悩を描いたジイドの著作集が世に問われ、また十一年に

は、哲学や芸術など、様々な文化を摂取して、人格を高めることを人生の至上目的とする、河合栄治郎監修の『学生叢書』の公刊が始まり、幅広い読者を得たものだった。⁴⁾

こうした著作が、相次いで受け入れられた事実こそは、かつて「青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくな」り、「強権の勢力は普く国内に行亘つてゐる」と現実を呪詛した明治末期の青年さながらに、空しく己に突き返されて、孤独な自問を強いられた、昭和十年代の内向する青春を、如実に照射するものにほかならなかつた。

既述のごとく三谷の言説は、かかる餓えに原理的な対応を見せるものだった。第一に指摘すべきは、三谷が学問分野において展開した規範的な国家論や法哲学の射程であった。それらはマルクス主義なき後、現実変革への意志に向け、改革への理論的根拠を呈するものとして存在意義を示したのであった。

三谷は法と国家を、人間が社会生活を営む上で不可欠なものと考えていた。しかし、このことは、現実の法と国家に対する無条件な是認を意味するものではなかつた。三谷は人間によって生き営まれるものは、ことごとく、人間の則るべき、普遍的規範下に据えらるべきと考えるがゆえに、かえって現実の法と国家にこそ、批判的意志を見せたのであった。その規範とは、究極的にはキリスト教の「黄金律」に根差す、三谷自身の形而上的確信に属するものであった。それはしばしば繰り返された言葉によれば、「相生相活」の精神、すなわち「人と人とかたみに自他の人格を相敬重しつゝ相生すること」であった。⁵⁾ かくして三谷において、諸個人の内面を統制するとき法と国家は、かかる根本原則を侵すものとして、厳しき批判の対象となるのであった。⁶⁾

三谷のこうしたまなざしは、社会主義思想が抹殺され、仮に与

すれば弾圧を免れぬ状況であるほどに、閉塞の時代に対し得る道として、希望的に映する可能性を胚胎していた。というのも三谷において、個人の自由を守らんとする意図は、国家の存在を否定せず、むしろその役割を限定し、普遍的価値の規制下に置くことで達成すべく試みられたが、それはアナキズム等、急進的社会理論や、マルクス主義の階級闘争理論の如く、国家や法の意義を認めず、それらを無くした地平にこそ、問題の解決を見る論理とは、対極に位置するものだったからである。

このことは、三谷の法哲学や国家論に従えば、抹殺された「危険思想」によらずとも、あるべき法、あるべき国家の待望という形で、閉塞を切り開く展望が描き得ることを意味していた。実際、こうした求心力が奏でた精神の劇として、時期的にはやや前後するものの、家永三郎氏存在が、示唆に富むものとして想起される。⁷⁾

氏の東京高校入学は、昭和六年、すなわち満州事変勃発の年であり、国家による心身両面における統制が、次第に強化されつつある頃だった。しかしながら氏は、祖国日本の存在意義を否定することはできず、ゆえに国家の廃棄を訴えるマルクス主義にも与し得なかつたという。東京高校は元来、マルクス主義の影響の強い学校であったが、そのような雰囲気の内であったにもかかわらず、思想的にも学問的にも、この革命の論理に距離感を抱かざるを得なかつたと、その回想録で顧みられている。

かかる精神的混沌と、統制の強まりつつある状況は、昭和十年代の青春が直面せる心象の原型といひ得るが、その渦中で氏が出会った著作こそは、三谷の『国家哲学』にほかならなかつた。氏は青年期の出会いを通じて、三谷の国家論に、理想としてのあるべき国家の姿をかいま見て、現実国家の是認とも国家廃棄の急進的

主張とも異なつた、みずからの思想的立場を築くことを得たのであつた。

個人の内的世界を前に、国家の意義と限界を厳格に指摘した、三谷の規範的国家論は、殊更に氏をとらえ、東京高校に在学中の昭和八年、家永氏は『国家哲学』を元に、純粹政治学、中性国家の確立を訴える「国家哲学の根本問題について」という一文を、学内誌に発表するまでに至つた。このとき三谷の『国家哲学』によつて築かれた理想国家のイメージは、氏の生涯を貫く基となり、ライフワークとも称すべき、教科書裁判を遂行せしめた不断の持続力と化したことが回想されている。

かくも深く刻み込まれた邂逅の体験は、法や国家を規範的に位置づけることでその役割を限定し、個人の内的自律を固守せんとする三谷の考えが、国家否定のマルクス主義とは違つ形で、時代閉塞を切り開く希望としての訴求力を、放ち得たことを示す好例と称し得るものである。⁸⁾

しかしながら三谷の求心力は、その法哲学や国家論の存在感にのみ歸し得るものではなかつた。というのも、マルクス主義崩壊後の昭和十年代の青春は、より内面的な、さらなる餓えを抱え込んでおり、三谷の実存に裏打ちされた言葉は、かかる餓えにこそ応え得る内容を携えていたからである。

3 戦時下日本の実存的課題と三谷

そもそも日本の思想界において、マルクス主義は、単なる社会解析の理論や、革命のための運動論に止まらない意味を持つていた。それは貧困から世界大戦まで、現代の悲惨をこごとく資本主義体制に帰結させ、その解決のために一切の私的所有を廃すべ

く、プロレタリア革命の必要性を説くものであつた。

それだけにマルクス主義は、固定化した機構社会に理想を問えず、現体制に反感を抱く個にとつて、「罪」の所在を示し、以て、呻く祖国を救う道を受けけるものとして、あるべき「将来」に眼を向けた、歴史形成的な世界観たり得たのだつた。⁹⁾

そのマルクス主義が、昭和八年における共産党幹部の転向及び、それに基づく大量転向を経て、昭和十年代に至つては、實質的に崩壊したのだつた。それは我が国の如く、マルクス主義が十分に人生論として機能し、目指すべき理想の一過程を担う者としての主体意識を育んで来た状況にては、「人生いかに生くべきか」を指し示す倫理的な規範の喪失として、深刻な思想的空白をもたらさずにはおかないものだつた。

かかる事態は、激化する戦争の時代、究極的には死を要請してくる統制国家で自己形成せざるを得なかつた昭和十年代の青年にとり大問題だつた。彼らにとつて急務の課題は、みずからの限りある生に向け、確固たる意義を与えることにほかならなかつた。

かくも迫真的な問いかけに対しては、単に閉塞の時代を打破すべき、理想を提示するのみでは足りない。あるべき「将来」への一過程を担う者として、確かな主体意識を育み得る歴史形成的な世界観、それも観念としてでなく、人間を心底から生かしめる力に満ちたそれこそが求められてくる。そして三谷の言説は、かかる餓えにこそ応え得る内容を携えていたのであつた。

このことは何より三谷自身が、昭和十年代の青年同様、わきあがる召命意識とは裏腹に、破局に向かつて突き進む状況下、無力の極みに落とされつつも、滑落する祖国のため何とか己を捧ぐべく、超越的な実践の方途をこそ問い詰めた人であつたことによつていた。

既に見たように、三谷は権力機構としての国家の意義を認めていた。しかし三谷自身は、かかる機構的国家観を超え出でて、「神の国」としての目的共同体をこそ本質視していた。¹⁰⁾この共同体は、隣人に働きかける実践的な愛を結合原理となすゆえに、成員たる個人の責務は、己が生業を通じ、現にある祖国同胞を、理想にまで聖化すべく、献身する道として問われることになった。

法哲学を講じる三谷の場合、天与の持ち場たり得たのは学問と教育であり、それは世俗の職務に止まらず、神の創造のわざを担うべき天職として、信仰的な位置付けがなされていた。国家権力の無限定な拡大をみた大正末から昭和初期にかけ、三谷が『国家哲学』などの著作中、国家の存在意義とその限界を思想的に問い質したのは、世俗のものなる法と国家を、信仰的批判原理に従属さすべく、哲学的な基礎づけをなすことをつづじ、「地の国」聖化の一過程を担わんとする志に駆られたがゆえだった。

かくして三谷にとり、「神の国」としての目的共同体に生きることは、祖国の現実を不断に改革すべく、実践的信仰に覚醒し続けることを意味していた。三谷はこの志あればこそ、歴史に対して傍観者たることなく、現実と主体的に対峙することを得たのであった。しかし、昭和戦前期の時勢において、現実と不断に対峙し続けるということは、戦争への道をひた走る祖国同胞の有り様を、つぶさに見届けることを意味していた。ことに関東大震災、および翌年の妻子との死別を機に、エレミヤ書と震撼的な邂逅をなせる三谷にとり、祖国日本の現状は、審判前のユダさながらと映じざるを得ないものだった。

かかる事態は、己が生業を通じ、現にある祖国同胞を、理想にまで聖化すべく尽力してきた三谷の内面に、多大な危機をもたらすものだった。というも、三谷は頹落の祖国に働きかけんとす

るほどに、失望と悲哀を余儀なくされ、現実国家を理想にまで聖化せんとする志それ自体を、深刻な疑念の下にさらさざるを得なくなつたからである。

内なる相克は、国際連盟脱退後、もたらされた孤立を軍事力によつて糊塗すべく、国防国家建設を急ぐ祖国の現実を直視する中で、ことさら激しくなりつつあった。とはいえ神与の使命を、「神の器」として隣人に働きかける道に見出した三谷にとり、絶望して祖国を見限ることは許されることではない。ここに三谷は、心底からの呻きをもらさざるを得なくなつていった。

しかし三谷は、自棄的態度に陥ることはなかった。祖国の現実に見出せぬ三谷は、現実を超える力ある言葉を求めて聖書に沈潜し、委えかけた使命観を、再び鼓舞せしむることを得たのである。このとき三谷を開眼させたのは、ダニエル書を通じて示された「神の力による完成」という希望にほかならなかつた。¹¹⁾

三谷が紡ぎ出した言葉を要約すれば、以下のようになるだろう。すなわち、世界の完成が全く人間の手に委ねられているとするならば、結局、人間の努力は虚しい。しかし、歴史に結末をつけるのは、この世を創造せる神である。神の前なる真摯な生は、いかに些少なものでも、それは世界完成への一布石として、歴史を統べる神が用いるところのものである。ゆえにこそ義に励む一生は無駄ではなく、各自の生に絶対的な意義がある。¹²⁾

こうした超越的希望の下、国家への志を問い直せる三谷が結実させたのが、日中戦争突入後、「社会科学の建設者」という副題の下に出版された『アウグスチヌス』にほかならなかつた。¹³⁾本書は、諸個人に使命負荷的な存在たる覚醒を促し、「神の国」到来の希望の下、各々の努力を、その到来の過程に参すべく課せられたかけがえない「召し」として意義つけた点で、「神の力による

完成」という希望が刻印された、三谷国家論の到達点と称し得る作品であった。

かくして三谷は、「神と共に働く者」として、「地の国」聖化の任を担うべく、あらためて救国のわざに邁進していった。昭和十年、三谷がみずからの専門分野初めての著作、『法律哲学原理』を著し、祖国を導く絶対的な基軸として、正義に基づく法の必要性を質したことは、「神の力による完成」という希望に覚醒する中で、みずからの使命を問い直した三谷の、「明治の青年」たる志の結実にはかならなかった。

昭和十年代の学生たちが接したのは、実に、三谷のこうした言葉であった点を看過すべきでない¹⁴⁾。三谷により、身をもって生き抜かれたそれは、「国家のための死」を意識しつつ自己形成せざるを得なかった彼らにとり、渴きを満たす生命の糧として受容され得る思想性と、人間を生かす、力の泉としての確かさを携えていたのである。

というのも三谷の言葉は、かつて「歴史の必然」を確言したマルクス主義がそうであったように、単に閉塞の時代を打破すべき理想を指示するのみならず、あるべき「将来」への一過程を担う者たる、確かな主体意識を育み得る歴史形成的な世界観を示しており、しかもなお、各々の生の意義を問いかけるにあたり、国家の付与せる心情体系を超えて、より深く普遍的な世界の相の下に、希望のありかを示すことを得ていたからである。

実際、歴史を統べる神への信仰に基づく、超越的使命観を問いかけた三谷の言説が、戦時下に置かれた青年を鼓舞せしむる基となったことは、三谷に生涯唯一の家庭集会を決断せしめたのが、東京大学第二工学部の学生、高橋三郎氏の切なる願いであったという事実が照射する¹⁵⁾。

氏の所屬せるこの学部は、対米戦を想定し、軍需産業の核となる技術者を大量に養成すべく、軍部の全面的後押しによって設立された点で、「戦争工学部」と称し得るものにほかならなかった。軍需産業の一端を担い、国家に死すべく定められた者にとり、生の意義への迫真的な自問は必至である。かつて吉田満は、その著書『戦艦大和ノ最期』の中で、学徒兵の内なる餓えを、「君国ノタメニ散ル、ソレハ分カル。ダガ一体ソレハドウイウコトツナガツテルノダ。俺ノ死、俺ノ生命、マタ日本全体ノ敗北、ソレヲ更ニ一般的大、普遍的な、何力価値トイウ様ナモノニ結び付ケタイノダ、コレラ一切ノコトハ、一体何ノ為ニアルノダ」という叫びに結実せしめたが、高橋氏の実存的関心が、彼らと同様な呻きに根差すものであったことは、氏みずから当時を回想した言葉の中に、如実に示されている。

かくも切実な自問を抱ける学生が、三谷への師事を渴望した事実こそは、信仰の立場から歴史形成的な希望の確かさを説いた三谷の言説が、あるべき「将来」に向けた実践の方途、および救済史を担う「神の器」たる生の意義を授けるものとして、遠からず死すべきことが明らかであった昭和十年代の青年にとり、生きてあることを確認せしむる生命の糧として、受容され得たことを証拠だてるものである。

思うにこの原理的対応性こそが、昭和十年代、理想を失い閉塞下に呻く青年が、三谷を慕い、その周囲に「遺りの者」とも称すべき一群を現した最深の理由であった。彼らは単に、三谷個人の人間的魅力にひかれて、三谷の下を訪れたのではない。それは思想的、構造的な閉塞状況のただ中で、国家への志を問いながら己が生き方を見極めねばならなかった青年たちの、うちなる渴望に基づく厳粛な出来事にほかならなかったのである。

4 おわりに・現代日本への視座

顧みて、閉塞した現状を切り開く規範意識、それを可能ならしむ主体意識を支えうる、歴史形成的な世界観への渴望は、何より、若き三谷のそれでもあった。三谷は「時代閉塞の現状」と評された明治末期、内村鑑三のキリスト教に出会い、祖国に社会正義が貫徹されんことを希求する倫理的主体として、新たに蘇生した経験を持つ人であったからである。

それだけに三谷は、理想を見失い、さ迷える青年の姿に、昔日の己を重ね、深くその呻きを察し得たのであった。その意味で、明治末期に青年期を迎えた三谷と、彼に師事した昭和十年代の学生との交流は偶然ではなく、精神的な必然と称し得るものであった。¹¹⁾

かかる連続性の所以を考慮しつつ、現代という時代の問題を内在的に問い直すとき、かつて明治末期の青年を呻かせ、昭和十年代の青春を暗く彩った閉塞状況としての、「歴史形成的な世界観の不在」は、決して過去のものではないことが理解せられる。同時にこのことは、近代日本の諸課題と主体的に対峙してきた三谷の言葉が、立ち返るべき起点として、今なお原理的な有効性を携えていることを示唆するものとなるのである。

注

- (1) 拙著『三谷隆正の研究・信仰・国家・歴史』(刀水書房 二〇〇一年)を参照。なお同拙著と本稿とは、内容・記述において重複する箇所が若干ある。
- (2) 南原繁、高木八尺、鈴木俊郎編『三谷隆正・人・思想・信仰』(岩波書店 一九六六年)以下『三谷』と略記)及び『三谷隆正の生と死』(刊行委員会編『三谷隆正の生と死』(新地書房 一九八九年)以下『生と死』と略記)を参照。

- (3) 『生と死』に寄稿している教え子たちの年代を参照(『生と死』二一九―二三〇頁)。
- そして大正十年前後に生を受けた人々は、森岡清美氏により「決死の世代」と位置づけられている(森岡清美、決死の世代と遺書補訂版(吉川弘文館 一九九一年)の序章を参照。この世代の内なる餓えについては、本書から大きな示唆を受けた)。

- (4) 戦前期におけるエリート青年の文化的関心の所在に関しては、筒井清忠「昭和前期におけるエリート文化としての教養主義・読書調査にみる学歴エリート文化の変遷」、田中紀之「戦時下日本の教養主義・『学生叢書』を手がかりとして」(いずれも戦時下 日本社会研究会『戦時下の日本』行路社 一九九二年)を参照。
- (5) 『法律哲学原理』岩波書店 一九三五年(南原繁、高木八尺、鈴木俊郎編『三谷隆正全集』第三巻 岩波書店 一九六五年 一九八頁ほか)以下『全集』と略記)。

この規範を支える世界を、己が国家論、法哲学の基礎たらしむべく論理化したのが、『信仰の論理』(岩波書店 一九二六年)『全集』第一巻)である。詳細は、前掲拙著八二―九四頁を参照のこと。

- (6) 『国家哲学』(日本評論社 一九二九年)『全集』第三巻)における批判(同 二五頁)を参照。なお本書第八章の「歴史的没理的所与」に関しては、拙著九五―一〇二頁を参照のこと。

- (7) 家永三郎氏が、三谷から受けた影響について述べた文章は、『家永三郎集』第一四巻(岩波書店 一九九八年)、一六巻(同 一九九九年)に数編収録されている。本文の叙述も負うところが大きい。なお氏の処女論文も、一六巻に収録されている。

- (8) ここに付言しておけば、とかく現代の評者が問題にする、三谷に

- おける祖国日本の「歴史的個性」の強調にしても、同時代においては、必ずしもその部分が訴求力を放ったわけではない。『三谷』に寄せられた回想を読むと、家永氏の例が照射するように、三谷法哲学や国家論は何よりも、「相生相活」を可能ならしむ則として、その規範的意義づけが持つ射程にこそ、読者を引き付ける力があつたことが明らかである（この点、野田良之「三谷隆正先生の法哲学」など、『三谷』『生と死』収録の回想を参照）。
- (9) 昭和初期の学生にとつてのマルクス主義の意味を、内在的に解析した作品としては松田道雄「なぜマルクス主義を信じたのか」近代日本思想体系『昭和思想集』筑摩書房 一九七四年 解説（同）わが生 活わが思想』岩波書店 一九八八年）が示唆に富む
- (10) 三谷の国家観については、拙稿「三谷隆正の信仰と国家観」（大濱徹也編『近代日本の歴史的位相・国家・民族・文化』刀水書房 一九九九年）を参照
- (11) 三谷が「神の力による完成」という希望を初めて語つたのは、「ダニエル書を読む」『日本聖書雑誌』一九三三年十月、『全集』第四巻）が最初である。なお、この時点では、いまだ漸進的の改革への希望に彩られていた三谷の志は、昭和一三年の東亜新秩序建設声明を皮切りに、昭和一五年の日独伊三国同盟締結に至つて、大きく転回する。
- 「ここにおいて、もはや神の審判としての祖国の破局を必至とみた三谷は、以後、焼き浄められた後の新生日本を担うべき、国家の礎たる信仰を遺すことに心血をそそぐ。最晩年における家庭集および「幸福論」執筆は、審判後の新地平を仰望した三谷の、祖国への「遺言」であり、それはまた、三谷の生涯を貫く国家への志の、最後の現れにはかならなかつた。この問題をめぐる内的連関の詳細については、拙著第三章第四節を参照のこと。
- (12) 三谷が個々人の超越的使命観について述べた文としては、「返礼の句」中川景輝追念文集『一路十字架へ』一九三六年（『全集』第五巻）、「完成した一生」河村俊平追想録『一九三七年（同右）等が典型的である。
- (13) 『アウグスチヌス』三省堂 一九三七年（『全集』第一巻）。
- (14) 三谷を振り返る回想には、『アウグスチヌス』に受けた感銘が少なからず示されている（たとえば野田良之「三谷隆正先生の法哲学」『三谷』一五九頁）、喜多川篤典「三谷先生のこと」（同右 一九三頁）、隅谷三喜男「三谷隆正先生のご生涯」（『生と死』一四四頁）。かかる事実は、信仰の立場から歴史形成的な使命観を説いた三谷の言葉が、みずからの確固たる生の意義を求めた戦時下の青年に対し、確かな求心力を放つものであつたことを証しするものである。
- なお、本稿でふれた、三谷の説ける歴史形成的な使命観と、同時代、「京都学派」が示した論理との間の決定的な差異に関しては、拙著二二丁二二四頁を参照のこと
- (15) 戦時下に自己形成した高橋氏の呻きの所在と、三谷への師事の経緯に関しては、『三谷隆正先生』（『エクレシア』第二号 一九四七年）、「真理を求めて・私の信仰遍歴」（一九八二年七月一八日 NHK教育テレビにて放映）、「私の戦中・戦後史」（十字架の言 一九九七年九月号）を参照（いずれも、高橋三郎著作集 第一巻（教文館 二〇〇〇年）収録。巻末の年譜も示唆に富む）。
- ところで、戦後、高橋氏が再入学した東大教養学部教養学科ドイツ科における卒業論文「キリスト教的著作家としてのカール・ヒルティ」（一九五四年）の結び部分（同右 三三丁一三三頁）を見ると、氏の初心として、祖国日本への熱いまなざしが存するのがわかる。思うにこの点でも、三谷の言葉は高橋氏の世代に訴えかけるものがあった。それだけに、三谷や内村が「日本」「祖国」といった言葉に込めた意味世界を詳らかにすることは肝要である。この問題に関し

ては、後日、あらためて考察してみたい。

(16) 吉田満『戦艦大和ノ最期』(『吉田満著作集』上巻 文芸春秋社 一九八六年)

(17) 明治末期の青年と昭和十年代のそれが抱えた、呻きの構造的同質性に関しては橋川文三『日本浪漫派批判序説』(未来社 一九六〇年)を参照。

参考文献

南原繁 高木八尺、鈴木俊郎編『三谷隆正全集』全五巻 岩波書店 一九六四、一九六五年

南原繁 高木八尺、鈴木俊郎編『三谷隆正・人・思想・信仰』(岩波書店 一九六六年)

『三谷隆正の生と死』刊行委員会編『三谷隆正の生と死』(新地書房 一九八九年)

『家永三郎集』第一四、一六巻(岩波書店 一九九八、一九九九年)

キリスト教文化学会編『プロテスタント人物史』(ヨルダン社 一九九〇年)

戦時下日本社会研究会『戦時下の日本』(行路社 一九九二年)

『高橋三郎著作集』第一巻(教文館 二〇〇〇年)

橋川文三『日本浪漫派批判序説』(未来社 一九六〇年)

松田道雄『わが生活わが思想』(岩波書店 一九八八年)

村松晋『三谷隆正の研究・信仰・国家・歴史』(刀水書房 二〇〇二年)

森岡清美『決死の世代と遺書 補訂版』(吉川弘文館 一九九一年)

『吉田満著作集』上巻(文芸春秋社 一九八六年)

以上